

『鎌倉殿』

世の中は 常にもがもな 渚漕ぐあまの
小舟の 綱手かなしも

鎌倉右大臣

〔現代訳〕

こんな平和な世の中が永遠に変わらないものであればよいのになあ。
海岸沿いに漕いでいく漁師の小舟の引き綱を別の漁師が引っぱってゆく穏やかな姿がしみじみと愛おしいことよ。

NHK 大河ドラマ「鎌倉殿の13人」に鎌倉右大臣が登場しています。三代鎌倉殿の源実朝のことです。

父・頼朝亡き後、兄の頼家が将軍となるも幽閉先の伊豆で殺され、いろいろな人の思惑渦巻く中、わずか12歳で将軍に押し上げられた実朝。自分の意志に関わらず政略的な結婚が決まり、いつだれに命を狙われるかわからない、そんな戦国の世の不安な思いの中で詠んだ歌です。穏やかな日が続いて欲しいという願いも虚しく、右大臣となった翌年、28歳で鶴岡八幡宮拝賀のときに、頼家の子・公暁に暗殺されてしまいます。百人一首の選者・藤原定家に和歌を学び、和歌を詠むときが心の安らぎだったようです。

山陽小野田かるた協会 久保久美子

【読みがな】

小舟(和歌の中では、おぶね)

綱手(つなで)

鎌倉右大臣(かまくらのうだいじん)